

大分県内各地でカワウによる川魚の捕食被害が相次いでいます。

①この10年間でカワウの数と、ねぐらの数はどのくらい増えたでしょう。

②放流したアユの稚魚が狙われやすい理由は何でしょう。

③カワウが増えないアイデアを何か考えてみよう。

放流アユの稚魚を捕食



黒木池でコロニーを形成するカワウ
〔2012年4月、宇佐市安心院町（県提供）〕

メモ
県はカワウの全般的な個体数を把握するため、2011年から本格的なモニタリング調査を始めた。ねぐらコロニーを確認した後、目標個体数を計測する。季節によって増減し、冬季になると県外から飛来するカワウが急増、多い月には県全体で2千羽近くになることや、主に春先に繁殖することなどが分かった。春先に日田漁協内で駆除したカワウの胃内容物を調べたところ、アユの稚魚が約50%を占めていた。放流されたアユの稚魚は成長するまで集団で泳ぐ性質があるため、狙われやすい特徴があるといつ。

県内各地でカワウによる川魚の捕食被害が相次いでいる。中でも春先に放流されるアユの稚魚への被害が深刻化している。県の調査によると、2003年から10年間でカワウの個体数は約4倍、ねぐらも約2倍に増加。県や県内の内水面漁協は食害の拡大、カワウの繁殖を抑制するため、対策に乗り出している。

増えるカワウ 被害深刻

10年間で 個体4倍 県などが繁殖抑制へ



県農林水産研究指導センター水産研究部内水面チーム（宇佐市）によると、カワウは潜水能力と移動能力に優れる上、大食漢で、繁殖能力が高い。県内に生息するカワウは2003年に130羽だったが、13年にかけては500羽に増加した。ねぐらは6カ所から11カ所へと増え、繁殖地（コロニー）も5カ所で確認された。

カワウは、県内最大級のコロニー（宇佐市）において、同市を流れている駅館川でもカワウの食害は深刻。駅館川漁協組合は、繁殖地（コロニー）は放流直後、すぐに狙われて食べられる。カワウのために餌をまいているような状態だ」と嘆く。各地で放流アユへの被害が相次いでいることから、先進地の事例を参考にカワウの繁殖抑制と捕食からの防除に向けた取り組みが県内でも進んでいる。

県はカワウの巣にドライアイスを置いて、卵を活性させない対策を取り入れ、アユが増加している理由は、つきりしない。これ以上、増やさないため、調査と被害防止の取り組みを地道に継続していく必要がある」としている。